

出土品が語る人びとの営み

平城宮の建設

平城宮には数多くの建物がありましたが、造営のためには莫大な資材が必要でした。発掘によって瓦、木材、石材など、建設に使われたものがたくさん見つかっています。こうした出土品は、建物の姿を推定する手がかりになるだけでなく、どのように資材を調達したかを考える材料にもなるのです。



人びとの生活

天皇をはじめ、貴族や下級役人が都で暮らしていくためには、日々の生活に必要な物資を地方から税などとして運んでこなければなりません。出土品の中には、土器などのように列島の各地からもってきたことがわかるものもあります。出土する荷札の木簡は、どの地方から何が都に運ばれたのかを知るかっこうの手がかりとなるのです。



①伊豆国から運ばれたカツオの荷札

②長屋王の邸宅に運ばれたアワビの荷札

さまざまな木簡

③造酒司が職員に対して出した呼び出し状



※イラストは早瀬和子氏による



食器と台所用品 箸やさじのほか、わんや瓢などの食器、壺・釜などの貯蔵用具、かまどなどの炊事用具が出土しています。

役人の仕事

律令制のもとでは、太政官以下の多くの役所がありました。役所では、現代と同様に書類によって日々の事務が処理されました。当時は紙のほかに、木の札（木簡）に書類や帳簿を書きつけることも多く、発掘調査の際にこうした木簡がたくさん出土します。

鬼瓦 屋根の檼（大棟・隅棟）の先端をおおう瓦で、魔よけの意味が込められていました。表面のほかに鳳凰の文様をかたどったものもあります。



保存と調査のあゆみ

保存運動と調査研究

都が長岡京に移った後、一時は平城京に都を戻そうという動きもありましたが、時は流れて都の跡は土の中に埋もれていきました。江戸時代の末になって、北浦定政による平城京の復原研究がおこなわれて、明治おわり頃の関野貞、喜田貞吉などによるすぐれた研究の結果、奈良時代の都の姿が次第にわかってきたのです。

それとともに、明治から大正時代にかけての柳田嘉十郎や満辺文四郎をはじめとして、現在も続く地元の人びとの協力、さらに戦後の国民的な運動にも支えられて、平城宮跡は保存されてきました。現在は国の特別史跡に指定され、奈良国立文化財研究所が継続的な調査・研究をおこなっています。

- 1852年 北浦定政の「平城宮大内裏跡坪割之図」などが完成。
- 1922年 平城宮大極殿朝堂院跡が史跡に指定。
- 1952年 平城宮跡が特別史跡に指定。
- 1959年 奈良国立文化財研究所による継続的発掘調査の開始。
- 1961年 木簡出土第一号。宮城内での鉄道検車区建設計画が国民的世論により中止。
- 1964年 平城宮の東側に張り出し部を発見。国道24号線バイパスの計画を変更し、宮跡を避けて東へ迂回。
- 1977年 「平城遺跡博物館基本構想」に基づいて整備事業が本格化。
- 1998年 朱雀門、東院庭園の復原がほぼ完成。平城宮跡を含む「古都奈良の文化財」がユネスコの世界遺産に登録。

復原と公開

平城宮跡では、発掘の成果をよりわかりやすく知っていただくために、さまざまな手法で遺跡の整備を進めています。遺構展示館では発掘でみつけた遺構の実物を見ることもできます。

また、遺構を埋め戻して保存し、その上部に型どりした遺構模型を展示する方法や、盛り土と植栽で建物の規模と柱の位置を示す方法、建物の基礎や壁の一部までを復原する方法なども用いています。さらに、朱雀門や東院庭園では、建物や庭そのものを当時の姿に再現するなど、現在も「平城遺跡博物館基本構想」にもとづいた野外遺跡博物館をめざして整備が進んでいます。



土器の実測

年輪幅の計測



遺物の研究と保存

発掘された遺物を正しく理解するためには、まず、実測、写真撮影などにより、正確な記録を作ることが必要です。それとともに、科学的な方法をもちて遺物の材質を調べたり、出土した木材の年輪幅から、その木の伐採された年代を判定したりする研究も進められています。

また、とくに木や金属でできた遺物は壊れやすいので、薬品などを使って長く保存できるようにします。このように、科学の力を借りながら、出土遺物を研究して、奈良時代の歴史をあきらかにするとともに、これらを後の時代まで保存していく努力が続きます。



瓦の拓本取り

くりぬき井戸の保存処理

